

語り手から見た昔話

——岩手県遠野の観光の現場から——

川 森 博 司

はじめに

筆者は、1994年度の民俗研究映像資料『遠野民俗誌94/95』の制作を担当した⁽¹⁾。この映像民俗誌では、観光の場における伝統文化の提示の仕方に焦点を当てて、「地域社会の現在」のひとつの断面を描き出すことを試みた。

岩手県遠野市は、1910（明治43）年に刊行された柳田国男の『遠野物語』によって有名で、現在、観光ポスター、パンフレット等では「民話のふるさと遠野」というキャッチフレーズが定着している。柳田の書物が呼び起こしたノスタルジックなイメージが観光資源となり、高度経済成長のなかで急速に伝承の場を失っていった昔話に対して、観光客に「遠野の昔話」を語るという形での新たな需要が生じることとなった。

このような状況に対して、観光の場で演じられるようなものは本来の伝承ではないとして真剣な研究の対象にしない立場もあるが、高度成長期以降に生じた新たな伝承の場として、これを積極的な研究の対象とすることも可能である。筆者は、このような観光の場のなかで展開される伝統文化の新たな提示の仕方を積極的な研究対象にしていくことが、現代社会の問題を民俗学的方法で考察していくうえでの重要な切り口になると考えている。

そのような視点から筆者は、映像資料制作という機会を生かして、観光の場における昔話の語りの状況を、できる限り参与観察的に考察することを試みた。具体的には、観光の場における昔話の語りの状況を、語り手、聞き手の双方に焦点を当てて映像記録するとともに、語り手および聞き手に対するインタビューを集中的におこなった。

本稿では、このインタビュー資料を、観光の場における昔話の語りを語り手自身がどのように見ているか、という視点から整理し、それぞれの語り手にとって昔話が現在どのようなものとして存在しているか、という点を浮かび上がらせることを試みる。また、語り手のインタビューを補うものとして、遠野の観光施設である「語りべホール」に来ていた観光客のインタビュー（実際に昔話の語りを聞いての印象）とアンケート調査の一部を収録し、できるだけ立体的に現在における昔話の語りの位相をとらえることをめざしたい。

昔話の語りに対する語り手自身の論評（oral literary criticism）を収集することの必要性は、

早くアメリカの民俗学者ダンデスの1966年の論稿によって指摘されている (Dundes 1975 [1966])。このことに関連して、同じくアメリカの民俗学者トールケンは次のように述べている。

「インフォーマント自身の自分の芸術に対する考え方を知ることによって、われわれが気づきもしなかった可能性が開かれ、自分たちの文化の美的先入観をさしはさむことから生じるつまらない間違いを避けることができるといえると思う。」(トールケン 1986 [1969]:232)

また、ダンデスは次のように述べている。

「さらに望まれることは、語り手、聞き手の双方から口頭の文芸批評を引き出すことであろう。」(Dundes 1975 [1966]:55)

このような指摘は、高度成長を経た地域社会の大きな変容のなかでも、その重要性に変わりはない。いやむしろ、これまでの研究において、語りの場に際しての語り手および聞き手による論評は十分にに取り上げられてこなかったもので、たとえば、観光という場において伝統的な語りが意識的に再構築されている状況は、真剣に検討すべき貴重な機会と考えられる。筆者は映像資料制作の過程でこのような状況に取り組み、参与観察に重点をおいた研究のスタイルと新たな民俗誌の可能性を考えるようになった。

本稿は、このような視点からの、語りの場の参与観察と語り手、聞き手の双方の語りに対する論評を総合する民俗誌の試みである。あわせて第2章には、現在40代の比較的若い世代が昔話の伝承に対してどのように考えているかを示すインタビュー資料を収録した。このようにして、それぞれの個人の視点から現在の生活との関わりで昔話をどう見ているかを、多様な声として示すのが本稿の目的である。その意味で、これらのインタビュー資料の分析は別稿に譲ることにした⁽²⁾。

伝承がその当事者にとってもつ意味を現代の状況に即して考察していくためには、このような作業の積み重ねが必要であると筆者は考えている。最終的には研究者の視点から意味づけをおこなわねばならないが、そこに至るまでにできる限り現場の声に寄り添うための方法的試みとして、このインタビュー資料を中心とした民俗誌を提示することにしたい。

1 観光施設での昔話

(1) 鈴木サツさん (1911 [明治44] 年生まれ、83歳 [年令は取材当時のもの、以下同様]、1996年10月逝去)

1986 [昭和61] 年にオープンした「とおの昔話村」は、柳田国男が1909 [明治42] 年に遠野を訪れた際に宿泊した高善旅館をそのままの形で移築した「柳翁宿^{りゅうおうじゆく}」を中心として、『遠野物語』誕生の経緯とその背景にある遠野の昔話・伝説の世界を紹介する施設である。

この「とおの昔話村」の一角にある「語りべホール」(1993年開設、150人収容)では、4月か

ら11月までの毎日、地元の語り手たちが観光客に生の昔話を語って聞かせている⁽³⁾。

1994年7月30日午前11時、鈴木サツさんは、25人ほどの観客の前で昔話をはじめた。

じゃ、みなさん、こんにちは。

これから、私の言葉が方言でございますので、どうぞよろしく願います。わけのわからなかったところは、あとから聞いてください、何のことだって。私にわかったら、説明させていただきます。よろしく願います。じゃ、「オシラサマ」の話、します。

むかす、あったずもな。

あるとこに父と母と、とっても美すう娘とあったたずもな。そこの家に、また何ともいわれねえ立派な男の馬っ子あったたずもな。

その童子^{わらす}ァ、年頃^{とす}になつてば、ますます美すくなつたたずが、いつも馬屋^{まや}の木戸…
(馬屋^{まや}って言えばね、馬屋^{うまや}って言えば皆さんわかるんでしょ。方言がね、一字抜くか足すかしえば方言なんです。馬屋^{うまや}、「う」はねえんだもん。馬屋^{まや}なんだもん。だから、そう思って聞いてくださいね。)

馬屋^{まや}の木戸さ行つて、こうすておっかかつて、馬と話^{はなす}すたり笑ったりばりしてらつたずもな。父^{とど}ァそれ見て、この童子^{わらす}、な一にして、馬と話^{はなす}すたり笑ったりばりしてるべと思って、あるとき、その童子^{わらす}から聞いてみたくもな。

「これこれ、この童子^{わらす}。お前^{めえ}なんじよなとこで、馬と話^{はなす}すたり笑ったりばりしてる」って言^しつたずもな。してば、その童子^{わらす}、

「そだって、おら、馬と夫婦になるもの」って、言^しつたずもな。

そうすつと、その父^{とど}ァごしええやいて、
「人^{しと}ばかにわがれた。人間と畜生と夫婦になるなつ、ばかなことあるもんでねえ」って。

そして、その童子^{わらす}さ、
「お前^{めえ}もお前^{めえ}だが、馬も馬だ」づしま、馬屋^{まや}のなかさ入^へつて、馬引^しっ張りだしたずもな。そして裏におーきな畑あつて、そこにおーきな桑の木あつたたず、その桑の木さ、その馬、ズルズルと引^しっ張り上げたずもな。

そして家^えのなかさ走^はごまつて入^へつて、切^くしえる鉋^{なた}だの鎌持^{かまぢ}つて、その馬の皮剥^はぎはじめたずもな。

さあー、その童子^{わらす}それ見て、
「父^{とど}、むぞやな、やめてけろ」って、オイオイって泣^ねえたずども、父^{とど}ァなんに、なんにもかにもごしええやけてたから、なんにも聞けねかつたずもな。そして、その馬の皮、半分ばり剥^はんでば、馬^うが死^すんですまつたずす、今少しで剥^はぎあげつとき、その馬の皮フワーンと飛^とんできて、そこに泣^なえてた童子^{わらす}、スポッと包^かんで天^{てん}さあがつてしまつたずもな。

さあー、母^かそれ見て、オイオイオイオイって泣^なく。父^{とど}も「さあ、すくつたことした」と思った

ずもな。馬ば目にあしべと思ったども、娘までこんたになるべと夢にも思わなかったと思って、
父と母と毎日毎晩に、三日も四日も泣きあかしたずもな。

してば、ある晩に、娘、夢枕に立って、父と母さ同じ夢見しえたずもな。

「父も母も、よーく聞いてけろ」って、言っただずもな。

「おれの親不孝、なんじょにか許してけろ」って、言っただずもな。

「おれ、悪い星のもとさ生まれたために、親孝行もしねえで天さ来てすまったから、なんじょにか許してけろ」って、言っただずもな。

そして、「そのかわり、来年の三月十四日の朝間、土間の白のなか見てけろ」って、言っただずもな。

「しえば、白のなかに、馬の頭っこみでな、ペッコな虫いっぺえいるから、その虫さ馬吊して殺した桑の木の葉っぱ取ってきて、食しえてけろ」って、言っただずもな。

「それ、蚕っこつ虫で、三十日も養けんば、こんたにおっきくなって、繭っこになっから、繭っこになったら糸とって」って、糸のとり方、教えたずもな。そして、「糸とったら機織って」って、機の織り方も教えたずもな。そうして、「その織物売って、父と母暮らすたててけろ」つ、夢見たずもな。

次の朝間、母早ーく起きて「夕べな、まづ、おれこんたな夢見たや」ってば、父も、「おれも同じ夢見たや」って。そして、二人して三月の十四日待ったずもな。待って、待って、待って、いてば、三月の十四日来たったずもな。朝間早ーく起きて、なにとりおき、土間の白のなか見てば、ほんとに馬の頭っこみてな、ペッコな虫、グチャーグチャーと、いっぺえ、いたったずもな。娘に教えられてらから、馬吊して殺した桑の木の葉っぱ取ってきて、食しえたずもな。

そうしてば、ほんとに三十日養かってば、こんたにおっきくなつたつと。そして繭っこになつたから、母、糸とって機織って、その織り物売って、父と母が暮らすを立てたんだと。そこで父と母が馬吊して殺した桑の木で、娘の面つこと馬の頭をこしえてまつたのがオシラサマなんだと。

オシラサマつものゝ、養蚕の神様でもあれば、目の神様でもあれば、女の病気の神様でもあれば、またオシラサマのある家さ、ええことあればある、悪いことあればあるって、お知らせする、お知らせの神様でもあるんだとさ。

どんどはれ（これでおしまい）。

サツさんは、これに続けて四つの昔話を語った。

30分間の語りの公演が終わって、私は取材チームとともに、控え室のサツさんを訪ねた⁽⁴⁾。

——これだけの昔話が、どのようにして口から出てくるんでしょうか？

「私、昔話をしゃべるときは、父から聞いた、その父の声が聞こえるんですよ。だからね、私は、

昔話っていうのは、本を見るんじゃなく耳から聞いたほうが、何つうの、残ってるんじゃないかなと、自分がそうだからそう思います。」

——お客さんは、鈴木さんから見ててどうですか？ お話しながら、ずっとお客さん見てて、お客さんの様子なんかは？

「あのね、どちらからいらした方でも、言葉がわからなくても、本気に聞いている人は私の顔、見てるんですよ。その雰囲気で私が乗っていくの、話が。そうだよ、話っていうのは、あのほら、冗談でいろんなことはしゃべるにいいんだけど、何ていったらいいかな、私は年寄りだとも、聞いてくださってるか、聞いてないかってことはちゃんとわかるよ。それによってしゃべるから、今日はおかしいとか、今日はあれだとか、思うことがあると思います。」

——この頃のお客さん、気の散ってるお客さんも多いんじゃないですか、カメラを出したり、何かいろいろ…

「あのねえ、カメラよりね、ひそひそ話されるのはいやだ。カメラはいいよ、自分だけでやる…、ひそひそ話はいいだ。ひそひそ話する人はここさ、入んねばいいんだもん。あたりも迷惑だからね。」

——でも全般的には皆さん、本当に一生懸命…

「あの、本当に聞いてく。だからね、もし言葉がわからないとこあったら、私でできることは私のがね、あの、解釈するから言ってけろって。これは何のことだ、とかって言うから、これはこうということだって言いますがね。言葉がわからなくても真剣に聞いている。真剣に聞くと何かしら頭に入るんじゃないかあござんすか？」

——若い女性が多いでしょう、遠野は。若い女性なんかはどうですか？

「若い人のほうが聞くんじゃないかあござんすか？ 年寄りとはわりと聞かないんじゃないかあござんすか。若い人ほど聞きます。ほんだよ、学校なんかさ行くとおもしろいよ。聞いている子と聞いてない子がすっかりわかるんだから。」

[ここで、撮影のためのライトで客席が見えにくいという話がサツさんからあった。]

——やはり聞いている人がよく見えないと具合が悪いですか？

「私はね、聞いている方々の聞く姿勢、あれが一番いいね。私はあれを見て、その聞いている方に語り込むんだねえ、悪いども。んだよ、今日なんかほんとに真剣に聞いているの。みんな真剣に聞いてらったよ。あの子どもなんかもとっても聞き方、上手だったよ。聞き方上手だって言えば、みんなに笑われるども、わかるからね。」

——そういう聞いている人がいて、こう言葉が出てくるような感じなんですかね？

「はい、はい。私が、方言でしゃべるから、たいがいの人はわかんないんだっけもや。」

[ここで同席していた昔話村支配人の谷口さんが会話に加わった。]

谷口「あの、昔話はさ、その土地の言葉で話したほうがいいから。それで、おばあちゃんは筋を崩さないからいいんですよ。あの、だんだんだんだん、覚えてくると、枝葉を付けて、説明

が多くなってしまうとダメなんです。」

「私はそういうことできない。だから、そうするなって言うの、妹たちさも。何かね、話、聞いてると多くなるようだけね。」

——妹さんたちの話はたしかにもう少し長くなってますものね。

谷口「親切心で、話をこうふくらましてね、これは何も悪い意味じゃなく、わからせよう、わからせよう、というための、解説が付いてくるんですよ。それじゃあちょっとね、ダメなんだなあ。まあ、いろいろ考えはね…」

「次の妹たちは頭がよすぎっから。私は教えられたとおり… 小澤俊夫先生⁽⁵⁾に「絶対作るな」って言われたったの、私は、最初に東京さ行ったとき。「お父さんから聞いたまま、おばあちゃん語れよ」って。それから私はね、絶対作ったことはねえもん。」

[先の冬に体をこわしてサツさんが入院した話が出た。そして、必ずしも体が丈夫ではなかったサツさんがこれまで続けてきた昔話語りの活動を振り返った。]

「いつ^{つき}月いつ^か日に、どこそこさ行かねばなんねえ、頼まれてたと思うと、そのときまでに何とかしなければなんねえ、と思うから、あの、気が張るんだっけ、そうすっと（病気、体調が）治るんだもの。私いつでもそうして治って… やっぱり、ずるずるべったりなら私は一気に死んだと思う。この昔話のあるおかげで今まで生きたと思います⁽⁶⁾。」

(2) 正部家ミヤさん^{しょうぶけ} (1923 [大正12] 年生まれ, 71歳)

鈴木サツさんの妹、正部家ミヤさんは、現在、遠野を代表する語り手として、全国各地の研修会やイベントなどで、昔話の語りをおこなっている。1994年8月1日、正部家ミヤさんは語りべホールで観光客に昔話を語った。公演の合間に、正部家ミヤさんから話を聞いた。

——きょうだいは女の方が多^{かた}かったんですか？

「女五人に、男二人です。それで七人きょうだいだったのね。今は、兄たちが二人いなくなったので、五人姉妹。だからさっきも話したように、東京にいる妹も、釜石にいる妹も、話ができるんですよ。いろんな所へ行って話をしますけども、静岡に一応勉強会に、私、行っていますけどねえ。だけでも、みんな、「どうしても先生のように話できません」って言うから、「私たちはね、生まれついて、ずーっと話聞いているから、染みついているんだ」って言うの、根っからね。勉強したとかそういう記憶がまったくないの。話を聞いて育って、自然にそれが身についてしまってるのね。だからその真似はできないと思うって。だけでも皆さんは好きな言葉で、標準語でもいいし、話しやすい言葉でね、話してみてくださいって言ったのね。そしたら、今だら15人ぐらい話しますよ、うん。」

——お年召してからね、お仕事としてこういう話ができるっていうのは、素晴らしいことですね。

「幸せですね。すごく幸せだと思うの。どこ行っても皆さんにホイホイされてね、ほんとにね、

ありがたいと思ってました⁽⁷⁾。」

——70過ぎのおばあちゃんが、今やキャリアウーマンになった。

「うん、そうですね（笑）。ほんとにね、楽しいんです、この仕事はね。どこ行っても喜ばれるしね。昨日の生徒さん、生徒さんっていても皆学校の先生なんだけども、250名以上の方だったけど、もう動かないの。懇親会があるので、懇親会のほうに行く方は懇親会のほうへ行ってくださいって。でも、動かないの、みんな。話聞くって。いやほんとにね、幸せですね。」

——それで今、全国まわっていらっしゃるんですか？

「全国まわってます。ほとんどここにいないくらいまわってるんですよ。だから昔話村、ここへ来ているのは妹（菊池ヤヨさん）と姪（菊池栄子さん）がほとんど多いんですよ。私と姉の分まで妹と姪が来てますから。姉ももう年取ってるんでねえ、自分で気が向いたときは来るけども、いやなときは「おれ、やんたよ」って来ないからねえ。」

——こういう昔語りを、どういう形でこれから引き継いでいくべきだとお考えになってますか？

「そうですねえ、あの、足したり減らしたりしないで、本当の伝承をしてほしいと思うの。昔話聞いたまをね、そのままを残して欲しい。だからよくこうして聞いてみるとね、そんなことおら覚えたよって。あの人たちの話コはよく聞くけども、それを私はアレンジしてしゃべるって言う人がいるのね。だから私は、アレンジして欲しくないと思うの。聞いた話は、聞いたままに話してって欲しいと思う。そうでないとほんとに遠野はね、何かこう、すたってしまう。危惧される。よそのほうがもう、どんどんどんどん勉強しているからね。それはどういう勉強しているかという、昔話というものはどのような形で保存してかねばなんねえかっていうことを勉強してんですよ。それがなくなってね、おらも覚えた、おらも覚えたってみんな好きなようにしゃべっていたんではね、本当の遠野物語がすたれてしまうんじゃないかって、それが心配ですね。」

——市とか観光協会など行政側は、「遠野物語」や「語りべ」を宣伝していますけど、そういうものを見て、ご意見があるんじゃないですか？

「あるんですよ。はたしてそれでいいのかって思うのね。だから、この人も昔話ができる、この人もできるってよそへも派遣しているんだけど、ねえ、こわい。これが遠野物語だって覚えられてしまったらこわいなっていうようなところがあるの。そして実際、お客さん方にも言われるんですよ。これが遠野物語かって。これでいいのかっていうようなことね。ほとんどあの人は標準語でしゃべってるとか、またあまりにも歴史の説明が多いとかね、そういうこと言われますね。昔話には説明がいらぬのね。で、実際、「昔ばなし大学⁽⁸⁾」で勉強させているのは、昔話というものはね、説明はいらぬ。しゃべったそのことを聞いた人がそれなりにストーリーを作って想像して聞いたらいい。そういうことをやってんです。だから、ここに出てきたこの文章はどこに誤りがあるかとか、どこが多いか、どこを取ったら正しいかというようなことを、やってますのでね。だから、あまり作ってほしくない、昔話は。」

(3) 菊池栄子さん (1940 [昭和15] 年生まれ, 54歳)

遠野を代表する語り手として活躍してきた三人姉妹、鈴木サツさん、正部家ミヤさん、菊池ヤヨさんの姪にあたる菊池栄子さん。以前から昔話を語ることを勧められていた栄さんは、1992年に開催された「世界民話博 IN 遠野⁽⁹⁾」をきっかけに語りべの活動をはじめた。1994年8月4日、語りべホールで昔話を語った菊池栄子さんに話を聞いた。

——栄子さん自身は、やはり昔話をおじいさんとかから聞いてらしたんですか？

「聞いたんですけどねえ、頭がいいもんだからスポンと抜けてあったんですよ。で、おばたちたちが、ほら、三人も四人も五人もやってるもんだから、あの、早くからね、やれやれってほんとは言われてやったんですけども、どうもあんまり若いとねえ。なんかこう、あれのような気して、やらなかったんですけども。50過ぎてからですね。なんたらおまえも「えんだは、えんだは(いいんだ、いいんだ)」って言われて、ほんと10年くらい前から言われてやったんですけどね。大変ですもの、だってねえ、ほんとにやればやるほどなんか難しいしね。で、あの、何ていうのかなあ、ほんととは真似してね、おばたちのようにやれたらいいんですけども、真似ってできないんですよ。だからもう、自分の持ち味っていうか自分の性格っていうかそういうので語るほかないような気がするんですね。で、ここで三人やっているんですけども、三人三様ですね。皆さん聞いたと思うんですけども、三人三様なんですよ。だからね、どれを真似してどれをあれしてっていうことはね、とってもできないから、結局自分のしゃべり方でしゃべるほかないなあ、と思っているんですけどもね。」

——お忘れになってたお話を掘り起こす作業っていうのは、どういうふうにされたんですか？

「おばたちは、きょうだいで、あや、こういうのもあったったとか、ああいうのもあったったな。だら、これ途中どうだっけってね、思い出してやってるみたいです。私なんかもう、ほとんど忘れてた。「ねずみの参宮」だけは忘れなかったけどもね、あとは始め覚えてるとか、真ん中は覚えてるとか、ねんだら、これこういうのあったったけ、んだら、これが最後どうなってとか聞くんですよ。そんすっと、「なんたらおまえばかりでや、それはこうだべや」、ああそうだっけ、そうだっけと思ったりしてね。あれだったんですけども、ほんとに何にもなかった時代だったからねえ、戦中戦後で。親父が戦争に行って、死んでくるか生きてくるかね、わからないっていう時代だったんですよ。でもね、うちのおじいさんとかおばあさんとかは幸せだったんじゃないかと思うのね。正部家の、おばの旦那、おじですね、と菊池ヤヨの旦那と、それから私の親父と、親父の弟と、四人まい行ったんですよ。全部帰ってきたんですよ、無事に。だって兄弟がね、二人も三人も行って、もうみんな亡くなってきてる所もあるんですよ。そういうふうな気の毒な人もね、いっぱいあったんですよ、あの時代だから。けどもね、ああ、これが一番心の安らぎだったのかなあって、あとからね、年取ってくるにしたがってそう思うんですけどね。そういう時代

にね、ほんとに今の子どもたち、かわいそうだなと思うのは、勉強勉強でしょ。私たちの頃、勉強なんて誰も言わなかった。ただ手伝いはさせられたのね。この辺は田舎だから、親父とかおふくろが早く出てくものだから、高学年だとかご飯煮るとかおつゆ煮るとか、低学年はもう、掃き掃除ですね、家のなかの。そういうことはやらせられたったんですよ。勉強はしなくてよかったから、いい時代だったなあと考えてね。」

——かなり皆さんに勧められてやってこられたわけですけど、一番若手としてですね、これから遠野の昔語りを、どういう具合に伝承していこうと思ってらっしゃいますか？

「難しいと思うんですよね。あの、ここで本当は、養成しようという話もあったみたいなんですけども、なんかまだやってないんですけども。若い人で、子どもたちに教えている人もいますんですけどもね、私はもう、そういうことはできないから。血筋に本当はね、いとか誰か、だんだんには出てくるんじゃないかと思うのもあるんですけども、今のところはほとんどみんな、何ていうのかな、遠くに離れててね。でもう、私一人っていうと変ですけども、今は一応、私一人なんですけど。それで、だんだんに、もうあと10年ぐらい経つと、いとかやるかなとか思ったりしているんですけどもね。あと鈴木サツの曾孫ですか、今小学校なんですけどもね。もう度胸は大したもんですよ。何年生かな、5年生くらいなのかな、もう小さいときからそばで聞いているもんだからね。やっぱり私と同じで、そばで聞いてて耳から入ったのっていうのは、あの、本読んだりなんかするよりは、頭に残るんでないか、と思ったし、私みたいに忘れるのもあるんですけど、そう思ったりしているんですけども。」

でも、ブームじゃないかと思うんですよね。どうなんでしょうね。はたしてどのくらい続くっていうと、何か未来がないような気がするんですけども。どのくらいの辺までこれが、皆さんが聞いてくれるかなあと思ったりしているんですよね。だからもう後継者って言われて、おまえは今度は誰さ教えて、かれさ教えてって言われるんですけども、何ていうのかな、だから、本読んだりテープ聞いたりするより、じかにおばたちがここで言ってるのを聞いたほうが頭に入るっていうかね、そういうふうな感じなんです。ほんとに、どうなんだべね。ほんとはこうね、育成っていうかとかそういうのやればいいんだろうと思うんですけどもね。私はとてもそういうタイプじゃないから駄目なんですけども。いとかやれば、やるのかなあ。菊池ヤヨの娘がそばに嫁に行ってるもんだから、あの子がやればやれるぐらいのもんで。あとはほとんどみんな遠くに行ってるんですよね。だからね、どのくらいこれが続くのかなあ。はたして私があと20年、30年まで続くのかなあ、とか思ったりしているんですけどもね。」

——今、たくさんの方の前でね、六日に一回ですか、やってらっしゃいますけども、いかがですか？

「そうですねえ。いろんなお客さんが来てね、おもしろいというに変ですけども、ああ、こういう人もいるんだとか、ああ、こういうふうな考えの人もいるんだとか、いろんなお客さんが来るんですよ。それであるとき、私、^{かみそり}「剃刀狐」っていうのをやったんですよ。そしたら「昔に剃

刀があったったか」って言われたたんですよ。「わあ、それまではわかんねえ」って言ったんですけど。それであとから「あの私、この話したら、こういうこと言われたんですよ」って言ったんですよ。そしたらある人が「剃刀っていうのは、昔からありましたからね。大丈夫ですよ」って言うてくれたんですよ。でね、いろんな人がいろんな話を教えてくれるんですよね。「あの、こういうことをあれしたけども、どうなんだろう、と思いました」なんて。「それはそうですよ、こうですよ」って言うてくれる人もいますよね、お客さんで。で、「標準語で語ってください」なんていう人もいますね。「言われました、この間」って言ったら、「あら、標準語なんてつまんないですよ。方言のほうがね、とってもいいですよ」って言われたりね。いろいろなお客さんがいて、ふれあいがあって。やっぱりどこにも同じような話があるということですね。」

——民宿だとか旅館に呼ばれて、よく行かれるんですか？ そっちのほうも⁽¹⁰⁾。

「ああ、ときどき行きますね。」

——どうですか？

「あのね、この前、福井から来た、漁師さんって言うてましたね。添乗員さんが「漁師さんで気が荒いから夜這い話をしてくれ」って言われたんですよね。「私、その夜這い話、知らない」って言ったんですけどもね。そういうお客さん、結局宴会の席でしょ。もう宴会の場でやるもんだから、そういう話を、聞きたいっていう人もいますよね。もうそういうとき困るんですよね。「私、まだそれまで行ってないから、もう少し経ったら覚えておきます」なんて言うんですけどもね。ほんとに、そういう人もいますよ。「たとえば、表はこうだけど裏はこうだっていう裏話があるでしょう」なんてね、そういうこと言われるんですよ。「私はそれまでまだ、表覚えるだけでもういっぱいだから、裏話はね、覚えてないから」って言うんですけどね。いろんなお客さんいますね。」

——栄子さんはおもに子どもの頃、昔話を聞いたのは誰からですか？

「おじいさんからなんです。」

——力松さん。

「そうです。」

——ということは、上のおばさんたちと同じ人から聞いたということになるわけですね。

「そうですね。そうだけれども、私は頭いいもんだからすっかり忘れちゃったんですよ。」

——いつ頃のことでか、おじいさんから聞いたのは？

「結局、小学校に入る前までは聞いたんじゃないかと思うんですよ。だから四つか五つ。結局親父がそのとき兵隊に行ったって言うてましたからね。利口な人は二つ三つの記憶もあるって言うんですけど、私はその記憶は定かでないから、あの結局物心つくっていうと5、6歳ですか。そのあたりから聞いたっていうのは、たいてい「ねずみの参宮」とか「お月お星」とか「屁つたれ爺さま」とか、いろいろね、聞いたんですよ。だけれども、さっきも言ったとおり忘れてやったからね。」

——でも、正部家さんなんかもおっしゃってましたけど、やはり子どもの頃に体に染みついたのが財産になってということで、時間があったとしても、やっぱり子どもの頃の経験がない人は無理でしょうね。

「だから言われたの。おまえは聞いているから大丈夫って。私はほんとに、人見知りするっていうか、そういうふうなたちだったんですけどもね。「おまえ聞いているから、絶対大丈夫だから、やれーやれー」って言われたんですよ。だからもう「あっ、こういうのはほんだからどうだっけ」って、「あっ、それはそんだっけな」、「こんだべ」ったら「ほんだっけほんだっけ」って思うような感じでね、身に染みてるっていえばちょっと変ですけども、わかるっていうかね。だから、最初っから本読んだりテープ聞いたりして覚えるよりは、楽でないかと思うんですよ。」

——そうですね。今後そういう経験がない世代になっていくとどうなるのかなというがね、心配でもあり、興味もあるんですけどね。

「そうですね。ここでね、なんか養成する話、さっきも言ったんですけども、あったんですけども、どうなっているかちょっとわからないんですけども。身内で誰かっていうんですけども、やっぱり皆ね、遠くさ出てるんですよ。」

——この間、菊池ヤヨさんのときですか、聞きにいらっしゃってましたけど、ここでおばさんたちの語りをよく聞きに来るんですか？

「そうなんですよ。でねえ、読むよりはまだ、ああそうかそうか、ここはこういうふうに言っているのかとか、ここがこれくらいの、何ていうのか、間のおき方っていうんですか、そういうのもわかるし。オシラサマしゃべって、すぐザシキワラシ、はい次は、ってこういうふうに、続けてしゃべっているのかなあとか、最初ね、そういうのも聞きたいからね、どういうふうにやっただろうと思って、しょっちゅう聞きに来たんですよ。ほんとにほとんど毎日のように、聞きに来たんですよ。最初わからなかったからね。で、話と話の合間にはちょこっとほかの話をしていいんだとか、ああ、こういう話をしてもいいんだとかってね。じゃあ、それでいいのかな、そういう話も混ぜて、次から次から、ずーっと昔話ばり、たて続けにしくなくても、ちょこっと世間話なんかもして大丈夫なんだなあ、とかね。そういうことも習いについていうと変ですけども、勉強しについていうかね、そういうふうにして、だいたいまあ、あの言い方はどうなんだろう、あんまり早くしゃべってもわかんねえって言うから、ゆっくりしゃべると、それではあんまりゆっくりだって言われるしね。あれ、だら、どれくらいの早さでやったらいいのかなあなんて、そういうこともいろいろじかに聞けば、ねえ、わかるから、と思って。これ、書いたら大変なんですよ。私、書いたこともあるんですけども。一回書いて、はあ、もうこれだからやめました。ちょこっとしゃべるにも、1ページくらい書かねばねかったもんね。やめたんです。」

(4) ^{しらばた}白幡ミヨシさん (1910 [明治43] 年生まれ, 84歳)

語りべホールの語り手のなかで最年長の白幡ミヨシさん。1994年8月3日午前10時頃、語りべ

ホールに出かける前の白幡ミヨシさんに、自宅の縁側で話を聞いた。

——この家を建て替える前は、曲り家の古い家だったんですね？

「はい」

——そのときの様子をちょっとお話しいただけますか？

「60年も前に私がここさ嫁^{とつ}いできたものだから、そのときは石の上さ柱が立ってたの、土台がなくて。それで床が落ちてしまうの。それで、あれは何年だったのかな、終戦……。それをまず新しく建てるつつうことは、ほれ、あんまり大^{うち}きな家は建てられねえてので、その家を修理したの。土台を入れて、壁もみんな落ちてしまうのだから、壁も塗り替えて、板も取り替えて、それからまた40年ばかり経って今度またやり直した。そのときの、一回建てて、二回目のときか、それから、ほれ、「ゆく年くる年」の撮影もしたし、「明るい農村」さも出はったし。さまざまいつもいつも、毎年のように皆さんで来てくれたった。で、正月は、昔からの、ここではあれ、ミズキダンゴって、豊作を祈る正月の行事をやったの。そうすっとほれ、全国から、みんなカメラマンさんが寄ってきて、20人も30人も来るの。正月の13日あたりから20日まで、いっぱい大勢の人たちが来て、賑やかに騒いでいたったの。だからもう新しい家^{うち}にすっと誰も来なくなるって言っておじいさんが亡くなったけども、また新しくなっても、おかげさんでみんな今でも来てくれます。」

——おばあちゃんは昔話は誰から聞いたんですか？

「そうだねえ、まず最初の小さいときは家^{うち}の人だね。夜になって、六つ七つになるあたりになってからだべかな、父親がここではほれ、ツマゴ（薬で作った雪靴）ってもの作ったの、夜。夜のご飯すめば、男の人はツマゴ作り、女の人は縫い物。してやれば、ほれ、おれが三番目だから次の妹があるために、そっちを寝かして縫い物してるわけ。するとほれ、「おっかあ、寝ろ、寝ろ」ってせがむという、ほれ、父親が「やむけやむけ、おら、むかし語って聞かせっから」って、で、ここさ家で昔話を聞かしたの。で、だんだん、ほれ、囲炉裏で話するときは「昔あったずもな、町さ行ってから飴っこ買ってきたずもな」なんて、そういうような、ほれ、簡単な話、して聞かせたの。「買ってきて飴っこ、こうやって伸ばせば、伸びた伸びた伸びた」って、こうやって伸ばしてから、ほれ、ここにいる子どもたちをころがして騒がしたりし、そんなことから、ほれ、昔話はじまったんだな。だんだん大きくなれば、ほれ、大きくなったなりに皆そういうふうにして聞いているものだからね、外さ出はって歩くようになるっていうと、ほれ、よその子どもも皆寄って集まって、「昔話するけ」となって話してるの。で、こういう話だ、ああいう話だって、みんな、ほれ、それぞれの話するもんだから、そうすっと、こっちで聞いた話とそっちと違うつと、「そんでんなかけ」って私みたいなほれ、このような「自慢好き」って言ったらいいか、何て言ったらいいか、ほれ、人の言葉は聞かねえで、自分の言葉で主張するもんだから「ほんでんなかけ、ほんでんなかけ、ほんだっけの」って言って遊んだったの。ほれからだんだん大

きくなっても、ここでは死んでも、祝いのときでも、今のように式場あってそこさ行かねえものだから、なんぼ小さい家でもその家でやったもんだから、そこさ行くていうと、みんな、ほれ、そこ部落の人たちが寄って、子どもから全部行ったの。年取った人から行って。で、お膳並べたところ、子どもたちも行くもんだから、跳んでくや跳ねてくや歩くもんだから、うるせえもんだから、どこさのおばあさんが、隣の家さ家借りて、そこさ行って昔話聞け、とか。厩の隅さ、ほれ、むしろ敷いて、そういうとこさやられた。物置の隅のような所さ行って聞かせられた。そういうこととして、ほれ、互い互いに、みんな、どこさ行ってもそういうようなことしたもんだから、あたりの回りの人だね、おもに。そういうようにして聞かせられたの。家の人ったって、家の人ばかりでは大きくなるまでさまざま話して聞かせねえの。だんだん大きくなるといって、ここでは糸を續んで、麻糸を續んで機織ったもんだから。糸績み、覚えねばなんねえんだから、縄なり、覚えねばなんねえんだから。それで、ほれ、みんな、寄り集まる家があって、やっぱり人の寄る家があってね、そこさ行くていうと、囲炉裏囲んで、ほれ、薬仕事でもなんでもする。四人並べばちょうどいいとこさ、八人も十人も行くの。してその間さ行って、ほれ、そういうような話すると、さまざまな話が出てきたんだ。大きくなれば大きくなったなりの話が出てきた。だから、小さいときは家の人。あとは回りの人。だんだん大きくなれば、大きくなったなりの話してくれるやつが、全部、それ、外の回りの人だ。こうやってた。」

——おばあちゃんね、今、こうして語りべホールで、しゃべるようになりましたけどね、そんなこと考えたこともなかったでしょう？

「考えたことはなかったの。それで、うちの、私の主人がやっぱりここで生まれて育ったもんだから、ここは、ほれ、昔からの南部神社もあったべし、このうしろには、ほれ、光興寺建てて、お城があったとこなんだって。そうすっとほれ、その地割りを聞きさ、大学生が来たもんだ。そうすっという、何仕事でも、今日はこうやって畑まけとか、シロおこせとか、何かかにか、忙しいときでも来て、五人も六人も来て、時間費やしていたったの。だからたまにほれ、ムカシ語って聞かせろなんて来たら、昔話ば知らないことにしって言われて話しなかったの。そういうように二人やってるつと何もできねえもんだから、貧しい家だったから。今でもほんとに、だけど今では、それなりの補助もあるべし、何かにあって、皆でやってけるからええども、働かねば食うに困る。で、昔話っていったって、しゃべらねえで、知らねえことにし、知らねえことにし、っていたったの。そいでもほれ、博物館がでて、あっちさ行っておれが機織り、サツさんは昔話、そしていたったども、もう20年も前だろうね。それからだんだん向こうから人が来るようになったんば、ここに浦田穂一さん（地元在住の民俗写真家）、カメラマン、その人を頼って来るもんだから、「ばさま、今日はな、あっちから来るからムカシ一つ語って聞かしろ」、「わかんねえってば」、「いいから、一つしゃべろ、一つしゃべろ」つのが、ほれ広まってきたったの。で、だんだん、ほれ、しゃべるようになって、おかげさんでこうやって今では出はっているから、いなかったなあ、と思ってるの。」

(5) 菊池^{たま}玉さん (1934 [昭和9] 年生まれ, 59歳)

白幡ミヨシさんの娘にあたる菊池玉さん。菊池栄子さんと同様に、1992年の「世界民話博」のときから、昔話の語りをはじめた。1994年8月2日、語りベホールでの昔話りの合間に話を聞いた。

——今、レパートリーは何話ぐらいでしょうか？

「うーん。さっきみたいにね、「ちょっぺいちょっぺい雀」とかああいうふうなのまで数えれば、百以上はねえ、うん。」

——お客さんの前で、っていうのは民話博のときから、本格的に？

「語りべって、まあそれ、前には母が、よく民宿とかなんかに頼まれて歩いたとき、体の調子の悪いときはその夜だけね、民宿に頼まれてちょこっと行ったりは、たまにはやった。一年に十回、一カ月に一回行くか行かないかそんなものだったの。で、民話博のときはまず本格的に出たわけなの。それから後、ずっとやってます。」

——昨日ですか、後ろで聞きにいらっしゃってましたけど、今も聞いて勉強したりという？

「そうだねえ。やっぱりあの人たちは先輩だし。何ていうべなあ。やっぱ年数がないでしょう。お客さんの前にこう立って話すっていうのが。たとえばヤヨさんの話はお客さんの顔を見てね、たとえばバスのなかで酔っ払って来た人が、時と場合には野次をとばすときもあるんだよね。それにも負けないで、そのお客さんを静める、そのお客さんさの何ていうべな、うまく話せねんだけんども、お客さんを静めて、やあやっと、「おとっちゃん、おとっちゃん、おれの話ッコのほう先に聞いてからなす」つように、ヤヨさんはやるんだよ。それができないんだよ、おらはね。だから、そういうのを勉強しに来るの、うん。今日はどんなお客さんが来て、そのお客さんに先輩の人たちはどのような態勢を取って話してるかなあというのを、物語そのままでなくね。それがまだほれ、おらたちは浅いんだ。いろいろのお客さんが来るからね。真面目になって、それこそあれ、この間も言ったように、相槌を打って「ふーん、ふーん」って聞いているお客さんもあれば、時と場合には、野次をとばしたり、また友だち同士、ガチャガチャ、ガチャガチャ言うお客さん、どんなお客さんもあるから、それをいかにして私のほうさ集中させるか、それが問題(笑い)。それはまだできない。」

——昔話をどのようにして覚えたか、というのをお話いただけますか？

「それは、私たちはほら、今は家を建て直したけども、曲り家、クズヤ(茅葺き屋根)の曲り家だね、全国からカメラマンがどんどんどんどん来たんですよ。サイクリングコースの清心尼公っていう女の殿様のお墓があるそばが実家なの。サイクリングコースの所だから、そこをサイクリングに来た人たちが、クズヤの屋根の上に百合の花と松の木があったのを、カメラで、よそから観光に来た人たちがみんな写すの。したらあるとき、うんと吹雪で雪の降るときに、子ども連

れた家族の人が来てから、寒くて足が冷たくて泣いたんだよ、子どもが。そしたら「あたれ、あたれ」って。そして、炉端ってわかるでしょう、家のなかの。その炉端さ火焚いてから、親父とおふくろとしてあてて、そしたら親たちはそれを見たいから、行くんでしょ。その清心尼公とか諏訪神社とかって、その辺見て歩く。ぞんだらば「おりゃムカシッコ聞かせっから、ここさ座っててけろ。そのうちにお母さんたちは見てからまた戻ってくるってらからなあ」って。そうしておらいのおふくろは昔話を聞かせたんだよ。そしたらそのなかに、あるカメラマンがいててから、それを東京のほうさ持ってって、ほら、見せるか何かやったんでしょ。そうしたら「あら、あそこのばっちゃん昔話聞かせっけ」となって、あとは遠野にも、その、浦田さんってカメラマンがいて、そうしてから「やあ、ばっちゃん、あの昔話な、いかったから、また客さん来たらここさ教えるから、ムカシコ聞かせろ」となったわけ。それを「あやまたばっちゃん、昔話聞かせてら、聞かせてら」って耳から耳さ流してやったの、おらたちは。だんども、あるとき「いやあおめえも語ったほうがいいではないか」ったで、「やんだやんだ、やんだやんだ」っていたったども、「だら一つだけしゃべってみろ」って、あるとき言われたの。で一つだけしゃべったけ、「あや、これ、えんだえんだ」となって、あとそれがどんどんどんどん広がって、ついに市役所まで聞こえて、引っ張り出されてきたの。」

——その一つというのは何だったんですか？ 最初に聞かせたのは？

「何聞かせたったべなあ。あっ「猿の嫁ご取り」。それを聞かせたの。そうしてから「民話博」があるっていったときにね、その、遠野に来れば、見るとおり隅っこに必ず氏神様があるでしょ。それが何してあるかって皆不思議がっておったの。その話を、だら民話博のときに言ったらええんでねえかっていうので、それを言ったの。それが機会になって、このように出るようになりました。」

——おばあさんからうかがってて、記憶のなかにはたくさんの昔話があったと思うんですけど、それを人前で自分が話すような場合に、つまり、聞いてて、でも自分で語った経験はなくて、それで人前に出たとき、スラスラと出てくるもんですか？

「だから最初はねえ。それから3、4年になっているからねえ、民話博から。よくやったと思うよ、最初はね。」

——やっぱり、そういう苦労があって。

「第一に、間違わないようにするのが一番、それだけ。間違わないように、間違わないように、それだけ頭にあってなあ、お客さんがどのように受けとめてるか全然頭になかった、最初は。」

——語りの内容は白幡ミヨシさん、お母さんと同じなんでしょうか？

「言葉は同じだと思います。あの、遠野っていったって、サツさんたちは綾織っていった、遠野から見れば下のほうの綾織町。うちの母の生まれた所は佐々木喜善って、柳田国男先生と佐々木喜善っていう、まんず物語を書いたその先生の家、佐々木喜善さより500メートルぐらいかな、下の、同じ土淵町って所で生まれたから、喜善さんの書いた物語と同じことを言ってる。だから、

オシラサマもサツさんたちとは、ちょこっとどこかが違うところがある。」

(6) 聞き手の反応

1994年7月30日から8月4日にかけて、語りべホールの参与観察を集中的におこなった際に、語り手のインタビューと並行して、語りべホールの観客のインタビューを何度か試みた。ホールから出てくるところや、語りを待つちょっとした合間を利用しておこなったものであるので、カッコ内に示した年齢は推定である。短いインタビューであるが、そこでどのような声が聞かれたかを、おおよその年齢順に整理して示してみることにした。

「なんか『遠野物語』を最初読むときは、すごく怖かったんですよ。だけどなんか、おばあさんとかの話聞くと、やっぱり、囲炉裏とかで話している姿とか、彷彿させられるっていうか、すごくいいなあと思いました。最後にちょこっと教訓めいたことを言うところが「ああそうだなあ」とかって思っ。」(女、20歳くらい)

「ちょっとおばあちゃんのお話、通訳がいるかなあ、なんて思ったんです。あんまし、ほんとに聞き取れなかったんですけど、まあみんなが笑っているところであいそよく笑って、いっしょに。そんな感じで、あんまし、わからなかったんですけどね。」(男、20歳くらい)

「なんか本読むよりもわかりやすくて、遠野の雰囲気とかを肌で感じられた感じがするんですけども、あんまり内容は聞き取れませんでした。」(女 20代前半)

「昔から、おばあさんとかから、聞いてたことあったんですけども、なんか楽しいですね。」(女、20代前半)

「楽しかったです。なんか最初はわかんなくて一生懸命こう耳かたむけて、こうかな、こうかなってなんとなくいってて、だんだん話もわかってきておもしろかったです。」(女、20代後半)

「やっぱり、直接にこうやって、こっちの言葉で聞けることがあまりないし、昔からも聞いたことがないし、自分の子ども時代も。こうやって語り継がれてるっていう、ねえ、別の世界の話っていうか、そういうのを聞けて、すごくおもしろいっていうか、いいなあと思って、何回か来ます。」(女、20代後半)

「とっても感動しました。言葉が昔の話っていう感じで、なかなか子どもたちに自分でも聞かせたことがないので、こういう話聞かせて、ほんとに夏休みの思い出になったような感じで、うん。」(女、30代前半)

「やっぱり方言的に結構関西人にはわかりにくいところはいっぱいあるんですよ。だけど、おばあちゃんの表情で物語の展開、大雑把な展開が、パサッパサッとね、そういうところではわかるんです。あと、やっぱり80になってもね、あのお年でみんなの前にやって来て堂々とお話されるってのはほんとに立派ですしね、またその笑顔っていうのが素晴らしくってね、ちょっとミーハーして写真を撮らせていただいたんですけども。もう一つ言うなら、たたみ敷きのお部屋で、おば

あちゃんには座布団に座ってもらってね、みんなで膝抱えながら、話を聞くっていうのがなんかいいような気がする。ここはほら、南部の曲り家がまだいっぱい残っているでしょう。だからそういう所でされたら余計になんかいいかなって気がします。」(女、30代前半)

「おばあさんの語り口が非常になごやかにお話されるもんですから、その辺も非常にすばらしいなあとっております。」(男、30代前半)

「何ていうのかな、昔、自分もそんな話を、祖父とか祖母とかから聞いたこともあるので、なつかしいっていうか、そんな感じがします。」(男、30代後半)

「いいお話でしたね。なんかこう、やっぱり味があってね。あとお孫さんの話なんか入れていただいたりして、なんかこう、あの場所にいただけでも暖かい雰囲気したんですけど、そういうお話入れてもらってね、ぐっとこう身近な感じしました。」(女、40歳くらい)

「そうですね、何回か聞いているんですが、はじめは全くわからなかったです。今は少しずつですけども、ある程度の意味はわかるようになってきましたけども。」(男、40代後半)

「そうですね。昔、よくおじいさん、おばあさんから聞かしてもらった記憶はあるんですけども、やっぱり宮城県とはまた違った味があって。ええ、方言などはぜんぜん、やっぱり感じが違いますからねえ。遠野って、なんか歌ありますよねえ。フォークソング・グループのなんか。そういうのでしか今まで知らなかったんで、ちょっとまたイメージ変わりましたね。」(男、40代後半)

「(言葉は)全部はわからないんですけども、こう前後で判断しまして。非常にしっとりとして、子ども心に帰ったような…。よかったです、はい。」(女、50歳くらい)

「やっぱり語りべさんのね、ほんとと人柄っていうか、この暖かさっていうのが、すごく感じられて、すごく楽しかったです。」(女、50歳くらい)

次に、同じく7月30日から8月4日にかけて、アンケート用紙を用いて、観客に語りべホールで昔話を聞いた感想を書いてもらう調査をおこなった。回収した用紙のうち、住所および年齢が記載されていたものを、北から順に並べて整理してみた。

「方言って難しい」(北海道枝幸郡、女23歳)

「おばあちゃんのやさしい表情とお人柄がとてもよかったです」(札幌市、女22歳)

「語っている口調が印象に残った」(札幌市、女30歳)

「直接「語り」を聞けてほんとうによかったです。方言は青森と似ているので、だいたいわかりました」(青森市、女44歳)

「人柄がにじみでてくるような語りでした」(青森市、女46歳)

「言葉がわからないところが多い」(岩手県宮古市、男41歳)

「語りべのおばあさんがユーモアのある人でおもしろかった。雰囲気全体が暖かい」(山形市、女18歳)

- 「自分のおばあちゃんの話を読いているみたいで、よくわかった」(山形県西置賜郡, 女28歳)
- 「おばあちゃんのプロアな遠野の言葉を聞いたのがとてもよかった」(山形県西置賜郡, 男32歳)
- 「なつかしい昔話のひびきにふれることができました」(山形県西置賜郡, 男33歳)
- 「明るすぎる。囲炉裏があるといい」(山形県長井市, 男56歳)
- 「方言でお話をおうかがいしましたが意味はわかりました」(宮城県志田郡 女53歳)
- 「一度テレビで拝見しましたのでぜひ来てみたかったのですが、私は大阪出身なので言葉がわからなかった」(仙台市, 女41歳)
- 「直接のお話を聞けてよかった」(仙台市, 女46歳)
- 「聞き取れなかった」(仙台市, 女45歳)
- 「方言がわかりにくい」(仙台市, 女45歳)
- 「もう少し言葉がわかるよう、前もって勉強してくるとよいと思った。楽しかった」(仙台市, 女57歳)
- 「生の語りべのお話にはとても期待してきましたが、早口に聞こえ、内容が理解しにくかった」(仙台市, 女64歳)
- 「とてもなつかしかった」(宮城県名取市, 女52歳)
- 「とても美しい鈴木さんのお話にユーモア満点楽しいひとときでした」(仙台市, 女59歳)
- 「方言がわからないながらも、全体の雰囲気です十分楽しかったです」(福島県伊達郡, 女53歳)
- 「たたみの上でじっくりと聞いたかった」(福島県伊達郡 男59歳)
- 「よく聞き取れなかった」(福島市, 女55歳)
- 「遠野の話し方でよくわかります」(福島市, 男63歳)
- 「大変ためになる」(福島市, 男65歳)
- 「やさしい語り口でとてもよい感じです」(栃木県塩谷郡, 女52歳)
- 「物語に引きこまれてしまいました」(栃木県小山市, 女27歳)
- 「子どものとき読んだ昔話を思い出してなつかしかったです」(埼玉県狭山市, 男27歳)
- 「目をつむって聞いていると、その世界に入っていました(わからない言葉もあったが)」(埼玉県鳩ヶ谷市, 男42歳)
- 「座ってたたみで聞いたほうがよいのでは」(埼玉県深谷市, 女54歳)
- 「言葉が理解できない。同じ日本語なのに!!」(浦和市, 男41歳)
- 「言葉を理解しにくかった」(千葉県市原市, 女54歳)
- 「話(言葉)がよく理解できない」(千葉県市原市, 男58歳)
- 「直接語りべを聞けてよかった。豆腐とこんにゃくの昔話がかわいくておもしろかった」(東京都, 女23歳)
- 「言葉がよくわからなかった」(東京都, 女29歳)
- 「言葉が全くわからない」(東京都, 男45歳)

「同時通訳が必要だと思った」(東京都東久留米市, 男30歳)

「流暢な語りをたんのうしました」(東京都府中市, 女47歳)

「囲炉裏の回りで聞きたいです」(東京都稲城市, 男10歳)

「語りべさんの声のやさしさが印象的でした」(東京都青梅市, 女34歳)

「今は、方言(それもきちんとした)を話せる人の少なくなった時代ではありますが、そのなかで一番東北を感じることでできる貴重な時間を過ごすことができたとうれしく思っております」

(横浜市, 女25歳)

「^{なま}生の語りべを聞けてとてもよかった。子供たちには少し難しかったようだ(方言がわからない)」

(横浜市, 女32歳)

「何をしゃべっているのか、よくわからなかった」(横浜市, 男32歳)

「生の語りが聞けるなんて素晴らしいですね」(横浜市, 男48歳)

「民話のよさが少しわかった感じ」(山梨県東八代郡, 男52歳)

「言葉がよくわからなかった」(静岡県田方郡, 女38歳)

「たたみに座って聞きたい」(三重県一志郡, 女30歳)

「聞いたこともない話がたくさんあることを知り、よかった」(奈良市, 男43歳)

「耳なれない土地の言葉が、わかりにくいながらも、耳に心地よくて、昔話の雰囲気満喫できました。話の内容も、とてもおもしろかったです」(和歌山市, 女26歳)

「なつかしい感じの昔話の数々でした。父から伝えられ、話の途中にも父の顔が浮かぶと言われたのが印象的でした」(和歌山市, 女26歳)

「わからない言葉もたくさんありましたが、遠野では、それが伝わるような気がしました」(和歌山市, 女39歳)

「実演を聞かれてよかったです」(和歌山市, 男43歳)

「言葉がわからない」(岡山県真庭郡, 男53歳)

(7) 谷口徹太郎さん(1940〔昭和15〕年生まれ, 54歳)

とおの昔話村支配人として、語りべホールの運営の主力になっている谷口さんに話を聞いた(1994年7月31日)。

——語りべホールを作った経緯をお話いただけますか？

「おとし「世界民話博」がありまして、ちょうどこの建物があいてたってわけですね。それで市のほうが使いまして、昔話は最初は向こうの柳翁宿のジョウイの間(囲炉裏のある部屋)っていうのでやっていましたけど、去年からこちらのほうに移動しまして、150人くらい入りますからね、ここを使って今年で2年目ということです。」

——この2年間、いろんな人にお話を聞かせてですね、支配人としては、お客さんを見てどう

いうふうに感じてらっしゃいますか？

「いっぱいあるんだけど、このとおり岩手県以外の人がいっぱい来ますよね。で、一番はわかってくれるかなと、これが一番心配ですし、まあ3話か4話、こう聞いてるうちにみんな納得しますしね。それから「あっ、わかってくれたな」と満足して。最初にはじまるときに「どちらから来ました？」って聞くわけですよね。で、まあやわらげて。まあ、言葉わかってもらわなくてもね、雰囲気だけ味わってもらえばいいかなあと考えていますね。」

——やはりこれをやろうと支配人が考えられて、皆さん、語りべホールを作ろうということで努力されたと思うんですけども、やはり皆さんのなかに遠野の昔話を聞いてもらいたいという熱意がすごくあったわけですか？

「うーん、ちょっと難しい問題ですね。むしろ地元の人たちじゃなくね、東京の方とかよその人たちが興味をもちまして、ようやくと地元の人が「あっ、これは素晴らしいことなんだな」という、どこでもそうでしょうけどもね、地元の人は案外無関心ですよね。というのは、昔から誰でもこういう話は知ってますし、話せますしね。だから受け入れたのは最近…。今、これからもこれを続けていくために、語りべ教室なんかも作ろうかなあと、考え中ですから、これやれば、まだまだ別の人も出てくるんじゃないかなと思ってます。」

——ここ「語りべホール」で昔話の語りをやっているということで、市民の方の反応はどうですか？

「いまいちですね。冬には「昔ばなし祭り」って、ここじゃなくね、伝承園でやっているんですけど、あまり地元の人たちは来なくてね、まあ固定したお客さんがよそから来ますけど、地元のお客さんがまだ定着してないっていうのが、なんとなくね、心配してますけど。でも、だんだん、だんだんね、そういう人が出てくるだろうしね。で、年取ってからね、こういう話すとすごくいいと思うんですよ。若い人はちょっとね、受けないと思うんですよ。」

——観光資本として、昔話はかなり役に立っているというように考えられてますか？

「私はね、役に立っていると思います。今後、夢ですけど、真打ちとか、ランクをつけてね、サツさんクラスはもう真打ちですね。あとはこう、何段目とか落語の世界のようにランクつけてね、1話でも2話でも、話して聞かせるのがいいんじゃないかなあなんて思ってますけどね。」

——お客さんがいつ来ても気軽に聞けるっていうことは、素晴らしいですね。

「4月からやってましてね、ほんとに（お客さんが）一人や二人でもね、決められた時間にね、11時、1時、2時にね、一人でもやりますよと。昔話村にあればお話が聞けるという体制をもち続けたいですね。今後ともやっていきたいと思ってます。」

(8) 谷^{やち}地信男さん (1942 [昭和17] 年生まれ、51歳)

『遠野物語』の語り手、佐々木喜善の出身地である土淵にある伝承園 (1984年開園)。「旅 遠野路」という観光用リーフレットには次のように記されている。

「昔の農家の姿を、カヤぶき屋根で再現している伝承園。国の重要文化財に指定されている南部曲り家「菊池家」や、千体オシラサマのオシラ堂、『遠野物語』の話者、佐々木喜善の資料館などがあり、予約をすれば、昔話を聴いたり体験したりできます」。

毎年夏に開催される「伝承園まつり」の二日目にあたる1994年8月7日（「伝承園まつり」はこの年8月6日、7日の二日間、開催された）、この伝承園の運営の主力となっている支配人の谷地信男さんに話を聞いた。

——こちら伝承園という施設が、作られました経緯とか、この施設の性格などをちょっとお話しいただけますでしょうか？

「柳田国男先生の『遠野物語』という形でしか一般的に知られておりませんが、実際『遠野物語』の土台をなしたのは、地元出身の佐々木喜善という方でございます。その伝承の人、佐々木喜善記念館をメインといたしまして、昔から遠野に培われてきた、いろいろな農家の施設をここへ再現して、現在に至っているというのが、伝承園の大まかな概略でございます。」

——土淵という、佐々木喜善さんが村長をされた地域にあるわけですけども、土淵の地域とこの伝承園との関わりはどういうような？

「ここの施設は、位置づけとしますと、社会教育的な位置づけのなかで、運営されているというのが特徴かと思います。特に伝承行事、今日もおこなわれておりますけれども、「虫追い祭り」、あるいは「馬っこつなぎ」というような形の伝承行事を、地域の老人クラブのおじいちゃん、おばあちゃんたちがそれを再現し、次代を担います子どもさんたちにそれを伝えていくというような形で取り組まれております。」

——この地域の老人クラブの方が、ここでだいぶ働かれていますということになるのでしょうか？

「はい。老人クラブばかりじゃございませんで、地域の社会教育諸団体、特に生活改善グループとか婦人会、そういうような団体活動をした人たちがここの伝承園という施設の運営のなかに関わりをもっていると、これが特徴かと思います。」

——この地域の方の反応はいかがですか？

「はじめは地元のものすべて何も珍しいものではございませんけど、お客さんがそういうものに関心を示していただくという形ですね、今は生きがいではじめた、たとえば工芸館の藁細工の実演とか、機織りの実演、そして手作りのお土産品というのは、やりがいから生きがいというような形で活動が前進しているというような形で評価されるのではなかろうかかと思います。」

——前うかがったときに、やっぱり単なるボランティアではなくて、観光のなかで、何ていうんでしょう、生きがいということとかかわって、作って販売するという、その辺のところを、もうちょっとお話しいただけますか。

「私、以前、社会教育関係の仕事をやっていたわけなんですけど、そこで社会教育と申しますと、教養を高める、あるいは趣味を満足するとかという形でしか、その成果が求められておりません

けれども、はたしてそれだけでいいでしょうか、というのがここを開設するときの私の疑問だったわけなんです。やっぱり学習したならば実践し、実践したならばそれが経済的なつながりに積み重なっていくということが求められるのではなかろうかな、というような形ですね、隣が地区センター公民館の施設でございますが、こちらに一步入った伝承園は、そういう実践をとおして経済活動に積み重ねていくというような位置づけになっております。ですから、現在ここに通っている老人クラブの会員の皆さんはですね、自分たちのもった技術をお客さんに評価され、それをお買い求めていただくというところに、大変生きがいを感じているようでございます。」

——今、いろいろ観光バスなどが多いシーズンかと思うんですが、こちらを経営、運営していくうえでのご苦労といたしますか、どういうことがありますでしょうか？

「やっぱり人と人とのつながりのなかでこの施設が運営されております。一般的に博物館の分館的位置づけになっておりますが、博物館は静的な施設と申しますか、資料をお客さんに提供すると。ここ伝承園は、動的な形で、いろいろな伝承行事をはじめとしたものを、お客さんに提供するというもので、大変人と人とのつながりがあるもんですから、そういうところのコミュニケーションを理解をしていただくまでには大変時間がかかるというのが現状でございます。」

——やっぱり観光客が多いのは夏場ということになるんでしょうか？

「はい。やっぱり遠野は夏型でございまして、シーズンはおおむね4月から11月頃までと、あとはオフという形になります。けれども『遠野物語』あるいは民俗関係を志す学生さんとか研究者にとってはですね、むしろその寒い遠野そのものを求めて来るお客さんも結構いるというような次第でございます。」

——このごろ民俗学のほうでも佐々木喜善に対する関心が高まっていると思うんですけども、そういうことで土淵のほうにいらっしゃるお客様っていうのは多いんでしょうか？

「そうですね、今がちょうど夏休み、あるいは冬休みとか春休みには、民俗関係を専攻している学生さんは必ずこの遠野、土淵に足を踏み入れて、レポート作成の資料としてですね、勉強に来ているようでございます。」

——今ちょうど夏休みでアルバイトの高校生とか大学生の方もここで働いているようですけども、若い人の評判はいかがでしょうか？

「私も施設の運営にはこだわりをもっているつもりでございまして、やはり若い人たちから見ますと、ここはちょっとタイムカプセルに入ったような世界でございますから、子どもさんたちにとっては戸惑いを感じるというようなこともあるようでございますけど、年配の人たちとの付き合いのなかに、生活の知恵的なものを逆に再発見しているというのも現状でございまして、これからの実社会には参考になるというような形ですね、結構高校終わっても短大に行っても、夏休みはここに求めてアルバイトに来ているという学生さんが今日も大勢来ております。」

(9) 佐々木イセさん (1930 [昭和5] 年生まれ, 64歳)

伝承園で昔話の語りをしている佐々木イセさん。1994年8月7日、「伝承園まつり」に際して、移築された曲り家の囲炉裏端で観光客に昔話を聞かせたイセさんに話を聞いた。

——イセさんはここで昔話をしているのはいつからですか？

「7年くらいになります。」

——きっかけは、どういうことで？

「私の姉が前にここで語ってたの⁽¹¹⁾。で、体調崩して出られなくなったんで、今度私が代わりに出てます。」

——今ここで話してる昔話は、誰から聞いたお話ですか？

「祖父から。あとは人から聞いたのもあるけども、大部分は祖父からね、小さいときに、子どもの頃に聞きました。」

——土淵でお生まれになられたんですか？

「そうです。土淵で生まれて、土淵で育って。」

——そうすると、それまでは、子どもの頃に聞いて、それから語る機会というのはなかったんですか？

「いや孫たちにね、孫たちに語ってましたので。今はハァ、大学生になったからあれだけども、小さいときにね、右左さの左から、語って聞かせて。」

——そうすると、ここでお姉さんの代わりにお話しするようになったときも、別にこう、苦労ということはなく？

「そうです、はい。あの、今は本当にそういう習慣がなくなったけれども、私ら子どもたちを育てる頃に、旧暦の10月に、御日^{ごひ}⁽¹²⁾ っていうって、仏様を拝む日がありました。そんなとき、親類同士呼んだり呼ばれたりして、私も実家に行くと、子どもたちが、兄の子どもだのいっぱい集まるわけです。兄弟が多いし、子どもも一座数になるわけ。そこでその子どもたちさね、昔話聞かせてらのす。」

——10月の…。

「はい。今ねえ、本当に、そういうことなくなったの。そういう習慣があったんですよ。」

——お客さんは、日本のあちこちからいらっしゃいますか？

「はい、そうです。」

——どんな感じですか、ここにいらっしゃるお客さんは？

「みんなねえ、いい所だって。空気はいいし、緑は多いし。で、ほら、この建物自体がね、こういうふうだから、気持ちが安らぐって。そうおっしゃって。この間、あの、台湾の留学生の方みえて、そしていっしょにお話したんですけども、「いい所ですね」っておっしゃってましたっけ。」

——昨日今日はお祭りということですが、普段の日も昔話をされるんですか？

「日曜日にはね、奉仕のような形でしてますし、あと、事務所に申し込んでもらって予約で語ります。」

——団体とかそういう申し込みがあったときに？

「ええ。一人でも二人でも団体さんでも、何人様でもね。」

2 若い世代の取組み

これまで、観光施設を拠点として昔話の語りの活動をしている人たちについて見てきたが、この章では、現在40代で昔話の語りに関わっている二人の女性を取り上げ、彼女たちが昔話をどのように見ているかを位置づけてみたい。第1章で扱った語り手たちと比べると、昔話を伝承することについて、時代の変化にともなう意識の変化が、彼女たちの言葉には見られるように思われる。変化の過程にある伝承の現状がどのようなものであるか、二人のインタビューから考えてみることにしたい。

(1) 細越^{ほそこえ}雅子さん (1954 [昭和29] 年生まれ, 40歳)

細越雅子さんは、市の観光ガイド講座を受講後、独学で昔話を覚え、語りべになった。現在、各地で昔話の出前活動を活発におこなうとともに、自分の子どもや地元の子どもたちに昔話を教えている。1995年1月6日、細越さんのお宅を訪ねて、話を聞いた。

——子どもさんにも昔話を教えていらっしゃるということですが？

「家にいて、こうやって教えられる、お風呂だとかどこだとか場所はまあ別として、教えられる人っていうか、そういう人がいないんだよね、遠野には。年代がもう全部上になってるでしょう、70以上だ、語りべさんが。そうすると、娘や息子が、もう私ぐらいか私より上でしょう。その孫となるとね、ファミコンとかサッカー⁽¹³⁾はやるけども、昔話なんてのは、今の子は。私がおっかないから、この子どもたちはね、やらざるを得なくてやってるかもしれねえけど、ちょっと無理だったけね、よそではね。」

——それで、ぜひということでお訪ねしたわけです。

「そうかそうか。」

——細越さんがこういう昔話をするようになったいきさつとといいますか、その辺のところを少しお話しいただけますか？

「私が昔話をやろうと思ったというより、しねばならなくなったというのがね、今からもう足かけ10年くらい前になるんだけど。そのときに最初は、遠野市でやったガイド講座っていうか、そういうやつを受けたんだけど、それでちょこっとまあ、声かかったりして、よそから来たお客

さんをご案内しているうちに、ありきたりの案内では遠野に来たお客さん、喜ばないのね。あの山の高さ、この川の広さ長さ、言っただって喜ばない。何を遠野に求めてそのお客さんたちは来るのかっていうと、「民話のふるさと」で、昔話がふんだんに聞けるだろう、どこに行っても、誰でも一つや二つの昔話は語れるだろう。そういうところに期待をして来るのに、実際の話が、語りべさんの数がそれほどないもんだから、それで私が案内をするよりは、昔話を覚えて語ったほうが来た方に親切だろうなと思って、それからいわば独学で覚えたというか、やりはじめたんですけどもね。私も実際はこのうちの娘ぐらい、小学校の1年生か2年生ぐらいのときまでは、おじいさんに聞かせられたったのね、その頃の聞かされた話は、今になれば思い出すのがほんとに二つか三つしかなくなったけども、ああ、あのとき聞いたああいう話、ああいうふうな語り方でいいんだなあと思って、私はもう誰に師事するでもない、教わるでもない、もう勝手にはじめたもんだから、独学で、もう自分流に、自己流にはじめたもんだけど、でも、私が聞いた頃とはまた言葉が違ってると思う。今自分で使ってる言葉もだんだん今風になってきたなあと思うけども、でもこの娘にも、あるいは息子にも言うけども、普通は使わなくてもいい、普通のときに生活のときには使わなくてもいいけども、あるいは人前に出たときに方言だけでしゃべると恥ずかしい思いをすることもあるかもしれないから、学校やなんかでは使わなくていいけど、せめて昔話を語るときには遠野の言葉を覚えてて語ってければいいなあ。何の財産も何もなくとも、今は昔話を語れるとか、方言を多少知っていることが、何ていうのかな、価値があるっていうのかな、うん。だからそれがまた、私の子どもだから仕方がないところもあるけども、方言を知ってるのも一つの取り柄みたいなもんだからね。私の教えられる限り、この子どもたちもやってくればいいなあと思ってね。」

——その独学で覚えたっていう、お客さんとかにお話ししようと思って、自分で覚えていくっていうのは、もうちょっと具体的に言いますと、どういふような？

「本読んだのね、まずね。まず昔話に関する本は、佐々木喜善のから柳田国男先生のから、まあその他にも、坪田譲治さん、松谷みよ子先生、さまざまいっぱいね、住井すゑさんの本から何か読んだんだけど、そのなかでも遠野らしくて、それからまた、誰が聞いてもわかるような内容。たとえば遠野のことだけを全部語ればいいことはいいんだけど、私の場合には反対に、遠野で語る機会よりも、外に出てね、東北6県はもちろんだけど、北海道だとか東京だとかにも呼ばれて、お話聞かせてくださいということで呼ばれることが多くなってきたら、遠野のどこそこの話という、そういうある一部の地域というか、そういう場所だけにこだわった話をするとか、その場所を知らない人には話が見えないの。なんぼ丁寧に語ってもね。そこで、たとえばどこにでもあるような話だけでも、遠野の言葉で語るからこそ、ああ遠野らしい話だなあと思って聞いてもらえるような、そういう話も覚えようと思って。それには本が一番いいのだから、いろんな本も読みましたしね。もちろん遠野の昔話については今まで出てる本も読んだし、あるいはまあ、先輩の語りべさんたちの語りも何回か聞く機会があって、で、まあ聞きながら、盗んだってば盗

んだようなもんだけどね、覚えてったんですけども。覚えてみればおもしろくてね、これがね。うん。嫌なことじゃないから、自分の好きなことやるのだからおもしろくておもしろくてね。最初のうちは一つ覚えるのも、ああ大変だなあと思ったけど、それがおもしろくなってくると、一日に二つも三つも聞いて、すぐ頭に入って、すぐそれがパッと出てくるのね。変な話、寝言でも昔話語ったって言われたけども、うん。おもしろいとそれ夢にまで見るしね。だからこういうのも作ったりしてね（昔話を紙芝居にしたものを見せる）。遠野の言葉で語ってわからない人には、方言にあまり馴染のない人には、こういう絵を描いてって、これをめぐりながらやると、多少方言わからなくても、この絵を見て粗筋がわかれば、聞いてるうちに、だんだん耳に慣れてくるんだっけもね。そうすると、ああなんとなく話が見えてきたっていうか、目で見るとじゃなくて頭のなかで、あれが見えてきたっていうふうになる。そして、「あの、これはカマドっていうんだよ」って言っても、今の子どもたちには、あるいは東京あたり行って若い女の人、男の人でもそうだけでも、カマドっていう意味を知らない、どういうものがわからない。ましてそれを方言で「クドで、まますたずもな」って言ったって、何のことかわからない。そのときはこうやって（絵を見せて）「カマドでご飯を炊いたんだと」って、絵を見るだけで、大体のあれがわかるんでねえかな、と思ってね。私も絵は上手ではねえけども、こうやってね、さまざまと描いて、そうして、これを見た人に喜んでもらって、して一つか二つ、こういう絵のついた話というか紙芝居風なのをやると、そうすると、そのあとは遠野の言葉で、そのままでしゃべっても大体の人は耳が慣れるんだべね。大体、笑い話は笑うし、泣く話はポロッとするようだし。だから、ただ昔話の語りべというのは昔話だけを語ればいいのでなくて、うん、何かしらそれこそサービスがあってもいいかなと思ってね。」

——それは、じゃあ、昔話をよそで語るときのために作られたわけですね？

「そうです。あるいは地元の、というかここらへん近辺の子どもたちでも、今は方言を知らないからね。ほら普通しゃべらないでしょ、語らないでしょ。だから、方言知らないから、結局は、遠野の子どもに聞かせるときも、やっぱりこういうのが何かしらあったほうが親切みたいな。今、そう私の年代ぐらいの人でもほとんど方言しゃべらねえというよりも、聞いてもわからねえ人多くなったんでねえべか。」

——もともとはそういう大体純粋な方言のようなので生活していたんでしょうけど、だんだん変化してきますよね。で、今はこういう昔話の言葉っていうのは地元の人でも相当わかりにくいということなんでしょうね。

「昔話であれば、大体の筋書きを知っている人であれば、わかるんだろうけども、一つ一つのちょこちょことした単語のね、方言が、まず今は一般的に生活するうえでは使われなくなったわけ。どこの家でも台所の流しとか、あるいは横文字でいえばシンクだとかなんだとかそういうふうにいうでしょうけど、昔はそういうことないから、たとえば台所のハシリっていうと流しのこと。そのハシリという言葉が何なのか今の人たちはわからないだろうし、たとえば、炭やなん

かで生活してた、マキを使って生活してたときには、その囲炉裏なら囲炉裏にある物にはちゃんと名前がついていたけれども、今はもう電化製品やなんかになってしまえば、その物自体を見ることも使うこともなくなってしまう。炭はわかる。備長炭だなんだって有名なものがあるから、炭はわかるけど、いざオギリって言葉が出てくると、何だろうってわかんないでしょう。木を燃やして、燃えたところをパッと消し壺に取っておいて、そして黒くなったやつ。それはカサカサの軽い炭なんだけど、それはまたね、火が付きやすいもんだから、こうして使うんだよ、それが燃え尽きると灰になるんだよっていったって、実際そのオギリを見たこともなければ、それからまた灰汁^{あじ}っていったってね、たとえば灰といえばわかるだろうけども、その灰汁もわからない。はさみ火箸も、それから五徳も、何でもそういう物自体がわからない。だから囲炉裏っていうと、ただこうね、四角い、切ってあって、木で板敷きの所にあるって、で、こう火が燃えているっていう、ふうっとそれを連想する人、思い出す人っていうかね、絵を見たりなんかしたの思い出す人はいても、一つ一つの物の名前っていうのは、まずほとんどわからないだろうから。まあ私の年代からしてもそうだけでも、まず炭でこたつだとか、あの炭火で煮たり焼いたりとかっていうのはまずないからね。無理もない、とは思うんですけどもね。」

——言葉の変化であるとともに生活の変化っていうものなんでしょうね。

「一番は生活の変化でしょう。昔話が純粹に残るようにするんであれば、ラジオもテレビもみんなない生活しないと言葉は残らないと思うし、そういうのを見聞きして、学校で標準語で教えられてたのを、^{うち}家に帰ってきたら「ただいま」って言った瞬間から、方言だけで暮らせとは言えないだろうし。だから、そういうふうなみんなが標準語化、あるいは共通語化した、生活も言葉もそういうふうに通語化してる、共通化してるときに、あくまでもほんのちょっぴりでもいいから、少しでもいいから、遠野らしさを残しておけたらなあ。これが遠野ですっていったって景色を山一つしょって、私はどこかに持ってって見せられないし、同じ山でも春、夏、秋、冬、毎日、時間によっても違う景色だから、その景色は見にきてもらうしかないけれども、もし見にこれない人があって、遠野を感じたいなあと思ったときには、私がそこまで出かけて行って、遠野の言葉でもってお話をすると、多分耳から遠野を感じて頭のなかに遠野が残るんでねえかと思ってね。それぐらいしか、私、できないもんだから、まあ私ができる範囲内で一生懸命やろう。もしできたら、何の財産は残せなくても子どもたちに、言葉の一つ、昔話の一つも残してやれたらな。うん。ただ、語りべになるとは思いません、これからの子どもたちはね。昔の炭の生活、囲炉裏の生活を体験してないもんだから、そういうふうな感じで味を出してしゃべりなさいと言っても無理なんですよ。私ぐらいのもんじゃないですか。私が小さいときは囲炉裏、囲炉裏っても自在鍵までは下がってなかったけども、囲炉裏はあったしね。そういう生活したから、カマドでご飯も炊いたから、大体は雰囲気は覚えていると思うね。」

——細越さんは、出身はどっちの地域なんですか？

「遠野の町場、今でいえば町場なんですけど、六日町。現在は町名は六日町になってますけど、

昔は、私が小さい頃までは、町名変更する前でしたから元町といっていましたけれども。南部の殿様のお城のあった時代だと、高級武士っていうか、上級武士のお屋敷があったあたりで、そのたまたま残った武家屋敷の一軒に私が生まれたんですよ。まあ今のようでないから、自宅出産という形でうちの母親は私を家でお産して、で私がずーっとそこで小学校卒業するまでその家にいましたから、茅葺き屋根の大きい家でしたよ。」

——大体、細越さんの世代で、もう細越さんが唯一ぐらいいかなんでしょうか。語りべというのは？

「語りべというよりも、私の年代でもそうですけども、大体にしままってとかいうか、まあ東京のきちんとした方ね、お話をできる方からみればちょっとなまってるなと思うらしいんですけども、私の友だちと話しても、なまりながらもかなり標準語とか共通語に近いしゃべり方をしますよね。で、なまったり方言を使うことが恥ずかしいんだそうです。」

——ああ、その同世代の人が。

「ええ。だから私がこういう仕事を、まあ仕事っていったら変だけれども、昔話というものをね、残していこうと思って方言で、まあ平気で私はしゃべります。そうすると「よく恥ずかしくないね」とたまに言われますけどもね。これも遠野の言葉で言えば「よくもしょすこもなくやってるごと」ということになると思うんですけども。「しょす」、まあ「笑止」、笑いが止まるということから、恥ずかしいということになった。そういういい言葉もやっぱり使われなくなって、方言というのは、ある意味ではかわいそうだなと。だから古い物を、大切な物も、ごみといっしょに捨てればまあごみだろうけども、大事に取っておいて価値が出てくると骨董品ということで、同じ物でもこうね、二種類に分かれる道があるように、言葉も使われなかったらかわいそうだなと思ってね。私の年代でも、昔話ができるぐらいに方言を知ってる人も少なくなったし、まあ、普段に使わないからね。」

——娘さんは、方言で昔話をしなさいって言われて、うまくできますか？

「昔話は、あれじゃねえかな。娘にとって方言というのは昔話のときだけに使う言葉であって、あるいは、普段ではそんなにね、使わないかもしれないけど、でもまあ、私の娘で私が家にもこういう言葉、生活用語として方言使ってますから、だから聞いて意味はわかっていると思うんです。ただ、昔何十年も前から伝わってきたようなイントネーションとかアクセントとか、そういうのでは、もうしゃべれないでしょ。方言も、今風の、より現代的な方言であったり、発音になったりしていると思うんですよ。「ごしええやく」(腹が立つ)っていうようなね、「おら、とつてもごしええやけたった」っていうようなことも、この子たちに昔話教えたときに言わせると「ごせえやく」となるんですよ。」

——ごせえ…

「そのほうがほんとはいいいかもしれませんが、でも「ごしええやいた」とか「ごしええやく」とか「ああ、むぞやなな」とか、そういう言葉、ちょっとしたこうイントネーションみたいなのがやっぱり、若い言い方に、新しい言い方になってね。……だから昔話のなかにはほんのちよっぴ

りその雰囲気、言葉で雰囲気を残せばいいぐらいなもので、あとの先二、三十年したらば、もしかすると遠野の言葉自体がなくなるんじゃないかな。しゃべる人がなくなるんじゃないかな。」

——で、娘さんにいつ頃から昔話を教えてらっしゃるんですか？

「最初はどうしても舌もよく回らないから、おんなじ話、一番最初に覚えた話が、「ねずみの話」だった。私がかたまたまこれを幼稚園だか保育園だかに行ってお話することになって、お稽古というわけじゃないけども、聞かせながらやってたら、おもしろくて聞いているうちに覚えたんですよ。で、普通、今どきの子っていったら変だけども、おんなじ話を二回も三回もすると飽きるっていうでしょ。それがこの「ねずみの話」は毎日のように何回聞いてもね、おもしろく聞いているんですよ。飽きなかったんですよ。そのうちにしばらくしたらば自分で、ちょこちょこ、ちょこちょこ、語ってる。あっ、これはいいなあと思ったらね、たいていストーリーは完璧に語っているの、後はそここ、つなぎ部分をちょこちょこっと教えたぐらいのもんで。大体そうやって覚えるみたいですね、うん。全部が全部教えなくても、聞いてるうちに、私も聞いて育ったほうだからだけでも、ちっちゃいうちに聞いたのっていうのは忘れないみたいです。」

——自分で表現する楽しさってのはそろそろ出てきてますか、上の息子さんなんかは？

「上のほうはそろそろそうになって。こっち（娘）は、大体まともというか、私が語って、大体このくらい、こういうふうに言ったら語れるなっていうので子ども用にというか、言ったくらいのことは覚えますけども、お兄ちゃんのほうはそれに枝葉をちょっとずつこう付け足すようになったんですよ。たとえばお母さんが語るときにはこういうふうに言ってるっけから、じゃあこのとこ、お母さんのようにしてみたいとか、ここのところはこの言葉で、こういうふうに変えてみたほうがいいのかね。自分で、私が教えないのにちょこちょこ枝葉を付けて、語れるようになってきた。だから白いお皿にお豆腐ならお豆腐だけ乗けてやったものに、ちょっとネギを足してみたり、生姜を足してみたりするようになって、そうやってきておもしろくなるんじゃないですか。」

——そういう子どもさんが昔話するのを聞いた方の反応はいかがですか？

「はっきり言ってね、2年、もう3年前になるけど、「民話博」をやったときに、半分の方は、小さい子どもが昔話をするのをすごく喜んで、驚いて聞いてったんですよ。あとの半分の方は非常に危なっかし気に、こういうのは大人の、それもしかもお年寄り、おじいちゃんとかおばあちゃんがやるのが当たり前だと思っていた話を、幼稚園にも入らないぐらいの4歳半か5歳前でやってますし、お兄ちゃんのほうも小学校の3年生か4年生でやってますから、そんなちっちゃい子どもが語ること自体不思議でね、ほんとにできるのかなって。途中で間違ったら泣き出すんじゃないかなと思って不安で見てた人も多かったらしいんですよ。何のことない、そのとき一番の薬は褒めることです。薬というか、上達方法は。ああ上手だ上手だって、そのとき、うまくいったたんびに褒められましたんでね、すっかりそれで上手になりましたよ。教えた以上に。だ

から褒めるのは一番の上達するもとだと思ってね。」

——ほかでも教えてらっしゃいますでしょ。そのなかから飛び出てきた子どもたちっていますか？

「この子、筋がいいというか、私が教えてても気持ちがいいくらい覚えの早い子がいて。上手な子がいるんですよ、やっぱり。で、その子は二度三度と色々な所に声をかけて、出したりもしましたけどもね。いくらがんばって教えて、その子もやろうと思ってがんばってるのはわかるんですけども、センスの問題もあるのかも知れません。はっきり言って、どんな話を語らせてもおもしろくないというか、その話に乗らない子どももいるんですよ。ところがびたとその昔話とその子がこう合うというか、そういう子がね、十人のなかに一人ぐらいいるんですよ。そういう子は聞いててもおもしろいですしね、もちろん。ただ、なかなか続けられないですよ。中学校から高校、で、高校を卒業するとほとんどの子が遠野を離れますでしょ。そうするとたとえば、たとえ二カ月か三カ月といっても、東京なりどこなり行ってくると、もう方言ではね、恥ずかしくて語れない、話せない。となると、結局その一時期覚えたものを忘れてしまうんですよ。」

(2) 高橋好子さん (1947 [昭和22] 年生まれ, 47歳)

冬場の観光イベントとして、「遠野昔ばなし祭り」がある。1995年1月8日、伝承園でおこなわれた「昔ばなし祭り」で高橋好子さんは昔話を語った。語りを終えた高橋さんに話を聞いた。

——今日昔話を聞かせてもらったんですけども、昔話を語るようになったきっかけをお話いただけますか？

「はい。きっかけは、仕事が保育園という、小さい子どもといっしょにする仕事をしてまして、そのなかで普段やっぱり昼寝とかなんとか、いつも絵本とか紙芝居とかを話す機会がありますけども、そのなかで昔話を少しずつ入れて、ときどき話してたんですが、それをやっぱり、もっと多くの人っていうか、私の場合はやっぱり最初は子どもたちを対象にして聞かせておきたいという、そういう思いがあって。それで民話博があったときに、一般の市民の方からも、という話があって、そのときにまあ応募したったのか、なんか話が通じたといえますか、それがきっかけで、皆さんといっしょに出るようになりました。」

——子どもの頃にこういう昔話をおじいちゃんとかおばあちゃんから聞いた経験はありますか？

「ええ、若干ありますね。やっぱり私もまあ祖父母、それから親もおりましたけども、いっぱいじゃないんですけど、今考えてみると、ああ、あの話がそうだったなあってというような話がこう、ちらほらとあります。」

——どんな話を？

「そうですね、うちの母親だったと思うけど、よく「なみなみの屁っぴり爺さま」とか、それ

から「豆っこの話」とか。で、やっぱり似たような話で「猿蟹の話」とか、やっぱりそういう昔話だったんだけど、遠野だけじゃなかったんだなっていうのが、今わかってきたっていうか。話で、はっきりと題と内容までがこれとこれっていうんじゃないんだけど、聞いているうちに思い出してきたっていうかね、そういうのがありました。」

——自分でそれを語る立場になって、難しい点というのはどういうところでしょうか？

「難しいのはやっぱり言葉のなかで、まあだいたいわかるんですけど、それがあある方言のところで止まってしまうっていうか、うん、何のことだろうって、一瞬自分でもわからない言葉があったりして。聞いてて、先輩の方々の、サツさんとかのお話聞いてるんですけど、ときどき自分でも、うん、何だろうって、わかんない言葉があったりするんですが、やはりほんとの遠野弁っていうものに、ちょっとまだ未熟だなっていうか…。まあ私もちょっと埼玉とかにいたり、それからいろいろ、まあ仕事柄で、無理に遠野弁を消そうってした時代があったような気がするんですね。で、そういう癖を直す、むしろ恥ずかしいって思いがやっぱり若いときあって、無理にそういう言葉を直そうとかってしたような記憶もあるんです。でも今は逆に、本当に純粹の遠野言葉っていうものを覚えたいなっていう気はしてますね。」

——やっぱり、そういう遠野言葉っていうか方言じゃないと昔話は具合が悪いというか、うまくいかないんでしょうか？

「そうじゃないと思います。やっぱりそれぞれの地方の話がありますから。でもやっぱり、なんか遠野に、遠野昔話っていうとやっぱり、ほんとに遠野に伝わってきた言葉で語るのが一番ふさわしいんじゃないかなっていう気がしますね。でも今、その正しいっていうか、ほんとの純粹の遠野弁を語る人はやっぱり70代ぐらいの人だと思うんですね。だから、うちは今70代の親がおりますから、ときどきそういう言葉を拾って、今のうちに娘といっしょに書き留めたりしておいたるときもあったんですけどもね、ええ。やっぱり方言の大事さっていうのが、何かこの年になってやっとわかってきたような気がしますね。やっぱり若いときはね、恥ずかしい、かっこう悪いっていうふうに思っていました。」

——ずっと保母さんの仕事をされているわけですか？

「ええ、そうですね。埼玉のほうでは幼稚園だったんですけど。子どもに携わる仕事が、まああらかた。今はちょっと小学生のほうに入っているんですけど。あらかた20年近くは、20年以上ですね、子どもといっしょにする仕事をしております。」

——あの、こういう人前で昔話をするようになって、なんか自分の変化というかそういうものはありますか？

「自分の変化はやっぱり、自分で気をつけて、言葉っていうものを語るときに、相手がわかるように話さなきゃなんないなっていうような、まあそういう言葉の大事さみたいなのかな、そういうものをちょっと注意するようになった、あるいは人の話をよく聞こうっていうような、そういうようなところと、あと人の反応っていうかね、これがわかるのかなあとか、それからどの辺

まで聞いてくれてるかな、なんていうのまで、ちょっとこう興味があるっていうか、そういうとこまで少しずつわかってきたような気がします。」

——普段の生活でもそういうことがあるんですね。

「そうですね、やっぱり今まで気がつかなかったんだけど、やっぱりそういうところもこう、見たいっていうかね、ええ。」

——柳田国男の『遠野物語』っていうのは、子どもの頃からそういう知識があったんですか？

「いえ、ほとんどないですね。それが、やっぱりきっかけは、子どもたち。やっぱさっき言った仕事のなかで、語る時間っていう、お話の時間みたいなものを作ったときに、今はこの子たちにはどれがふさわしいかなっていう感じで、一応自分が読んで、選んでから、こう話を見つけたっていうのかな。私の場合はそっちが最初ですね。だからまあ自分が、柳田国男の本とか、遠野の昔話とか大体は読んでみて、そして年齢にあった話を自分がマスターしたっていうかね、読むのと聞かせるのではちょっと違いますね。」

——読み聞かせのようなことを？

「はい、そうです。結局、最初は読み聞かせが…。」

——自分の語りではなくて？

「そうですね。最初は『子ども遠野物語』ってのがあるんですけども、ユネスコから出てるので。それを読んで、それが最初ですね。でもやっぱり4歳5歳の子どもたちで、ちょっと理解できないような内容とか言葉が多いんですね。で、その辺を、ちょっとこう、どうしたらいいかなあっていう感じで。あとはこう、自分なりに変えたり、それから今の言葉に直したりして。読み聞かせが、やっぱり最初のきっかけです、私の場合は。」

——さっき「笛吹き峠」が一番好きというようなことをおっしゃってましたが？

「はい。そのきっかけは、ファンタジー⁽¹⁴⁾ってのが遠野にあるんですが、その第1回のファンタジーで、自分が「笛吹き峠」を演じたんですよ。だから、自分にすれば、遠野物語に入ったきっかけが「笛吹き峠」だったというのも一つあるんですね。それがちょうど20年前なんですよ。で、今年で20回目です。で、遠野物語を素材にした市民劇をはじめたのが「笛吹き峠」だった。そこでちょうど出演したもんで、それがまあ板についてるっていうか、まあ自分がこういう世界に入った最初の物語が「笛吹き峠」だったということがあるんですね。」

註

- (1) 民俗研究映像の制作は国立歴史民俗博物館民俗研究部の継続事業で、1988年度から毎年1本ずつの制作をおこなっている。本稿は、1994年度の研究映像制作の過程で得られた成果にもとづくものである。なお、インタビュー資料のテープ起こしに際して、牧ヶ野靖子氏の協力を得た。
- (2) 川森(1996)において、その分析の一端を示している。
- (3) 語りべの出演料は、1日4500円～5500円である(1994年8月現在)。
- (4) インタビューは、川森と杉本大三郎(映像の構成補佐担当)が共同しておこなった。以下、同様。
- (5) 小澤俊夫氏は、筑波大学教授を経て、現在、白百合女子大学教授。口承文芸学専攻。『鈴木サツ全昔話集』(鈴木サツ全昔話集刊行会、1993年)を荒木田隆子、遠藤篤と共同で編集している。
- (6) 鈴木サツさんについては、「昔話と私」という聞き書きがある(鈴木 1993)。語り手の意識を内側から知る

- うえで大変貴重な資料である。
- (7) 遠野では、このように現在のことを過去形で表現する傾向がある。
 - (8) 「全国昔ばなし大学」のこと。小澤俊夫氏が主宰している昔話の勉強会で、保母さんや図書館関係者などが多く参加している。
 - (9) 「世界民話博」は同時期に開催された「三陸博」に合わせて、1992年7月4日から8月31日まで開催された。「世界の民話・語り手ライブ」、「現代の語り手によるストーリー・アワー」、「柳田国男と遠野物語」展、シンポジウム、講演会、民話劇などの催しとともに、会期中を通して「遠野地方の昔話」が地元の語り手によって語られた。
 - (10) 遠野市内の旅館や民宿では、一定の料金（7000円程度）を払うと、語りべさんと呼んで昔話を聞くことができる。
 - (11) 姉の阿部ヨンコさんについては、花部（1991）がその語り手としての特質を論じている。
 - (12) 御日…「旧暦10月は「仏月」と言われて、各家に「御日」があった。死者の命日に関係のある「仏事」の日を「節々」と言ったが、そのほかに、毎年先祖の供養をする日をそれぞれの家で定めてあるのが「御日」である。戦前この日には、その家に他家から嫁いだ者や、その家から出た者も招び、揃って仏を拝む習わしであった。精進料理ではあるが、その年の新穀を供える意味もあった。夜の行事だから招待者はその晩は泊った。当時はどこの家でも必ず行ったが、今日ではほとんど行われていない。」（留場 1988：335）
 - (13) 遠野ではサッカーが大変盛んである。遠野高校サッカー部は全国大会で何度も活躍している。
 - (14) 「遠野物語ファンタジー」のこと。1976年からはじまった市民の舞台活動で、毎年冬に『遠野物語』に題材を取った劇を演じている。

文献

小澤俊夫，荒木田隆子，遠藤篤編

1993 『鈴木サツ全昔話集』，鈴木サツ全昔話集刊行会。

川森博司

1996 「ノスタルジアと伝統文化の再構成—遠野の民話観光—」『観光人類学』山下晋司編，新曜社，pp.150-158。

鈴木サツ

1993 「昔話と私」『鈴木サツ全昔話集』（小澤俊夫，荒木田隆子，遠藤篤編），pp.309-337。

留場栄

1988 『山人炉端話—遠野の民話・一農民の生活記録—』（熊谷印刷）

花部ゆりいか

1991 「村おこしにも一役，伝承園の語りべ 阿部ヨンコさん」『語り継ぐふるさとの民話—24人の語り手たち—』日本民話の会編，農山村文化協会，pp.20-31。

トールケン，ベア（Barre Toelken，川森博司訳）

1986 [1969] 「イエローマンの「美しい言葉」—ナヴァホ族のコヨーテ説話—」『ユリイカ』18（7）：226-243。

Dundes, Alan

1975 [1966] “Metafolklore and Oral Literary Criticism” in *Analytic Essays in Folklore*, The Hague: Mouton Publishers, pp. 50-58.

（国立歴史民俗博物館民俗研究部）